

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大谷博俊
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 津田芳見 副主査：（鳴門教育大学教授） 葛西真記子 委員：（鳴門教育大学教授） 田中淳一 委員：（鳴門教育大学教授） 田村隆宏 委員：（岡山大学准教授） 吉利宗久
3. 論文題目 知的障害教育における進路指導に関する実践的課題の論究 －特別支援学校の教育課題・課題の関係者・課題の進展過程からの分析－	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 大谷博俊 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成25年7月13日（土） 14時35分～15時05分 場所：鳴門教育大学人文棟6階A3会議室 A617室 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す序論と4部13章から構成されている。 序論 本研究の目的と本論文の構成 第1部 知的障害教育における知的障害特別支援学校高等部の教育 第1章 知的障害特別支援学校高等部における職業教育と卒業者の進路状況の推移 第2章 知的障害特別支援学校高等部生徒の実態と教育課題 第3章 知的障害特別支援学校高等部教育における進路指導 第2部 知的障害特別支援学校における進路指導にみる学校から社会への移行を支える環境の調整・整備 第1章 進路指導における初職入職のための個別の教育支援計画の意義 第2章 進路指導における初職入職から自立期に向けて個別の教育支援計画の意義 第3章 進路指導における特別支援学校と関係機関との連携の在り方 第4章 就業体験における教員と教育関係機関外の支援者との連携に関する考察 第5章 多変量解析に基づく就労支援者が重視する移行支援における課題の検討 第6章 補論：知的障害者の自己の理解を育む進路学習 第3部 知的障害特別支援学校における授業としての進路学習の在り方 第1章 総合的な学習の時間における進路学習についての授業的方法による検討 第2章 特設された進路学習についての授業的方法による検討	

第4部 総括的考察

第1章 本研究の要約

第2章 まとめと今後の展望

各部ごとの論文概要は以下に示すとおりである。

序論では、知的障害教育、特に知的障害特別支援学校の進路指導における研究課題を指摘し、それに基づく本研究の目的が、次の2点であることを述べている。第1点は、教員と関係諸機関等の支援者、進路先関係者との連携のあり方について、実践研究や調査研究を通して検討し、実証的に明らかにすること、第2点は、進路学習を授業的方法に即して検討し、知的障害教育における授業としてのあり方を明らかにすることである。また、本研究が、4部より構成されていることを示している。

第1部では、本論文の問題の背景として、知的障害特別支援学校高等部生徒の実態において、軽度な知的障害の増加、発達障害のある生徒の存在などを示し、彼らに対する教育的支援の重要性を述べた。教育的背景として知的障害特別支援学校高等部における職業教育と卒業者の進路状況の推移を分析し、教育的課題について明らかにした。また、知的障害特別支援学校高等部教育における進路指導に関する研究を概観し、進路指導における要点が、本研究の目的である「連携」、「進路学習」であることを指摘し、研究課題について詳述した。

第2部では、知的障害特別支援学校における進路指導にみる学校から社会への移行を支える環境の調整・整備をテーマとし、事例研究、実践研究、調査研究、などを通して検討した。

まず、知的障害者の事例研究を通して、就労支援のための進路指導において、個別の教育支援計画を活用し、企業、職業センターと連携し、初職入職、及び入職期から移行完遂までの間指導実践を行い、実践記録を分析することにより、その意義と有用性を明らかにした。

また、半年で離職した知的障害者に対する追指導に関する実践研究により、知的障害特別支援学校と地域障害者職業センターとの連携のあり方を検討すると共に、知的障害特別支援学校の就業体験における教員と教育機関外の支援者との連携のあり方について検討し、当事者である知的障害者、及び支援者の認識を多面的に捉え、支援体制を構築することの重要性を指摘した。

さらに、調査研究により、就労支援者が重視する発達障害者の職業生活に関わる自己の理解について検討し、進路指導・キャリア教育において育成することの重要性を指摘したうえで、知的障害者の自己の理解を育成するための教育的支援に視点をあて、知的障害特別支援学校高等部の進路学習について検討した。

第3部では、地域社会におけるボランティア体験学習という啓発的な経験に、自己の評価的側面を取り入れた知的障害特別支援学校高等部の進路学習を取り上げ、授業的方法に即して、授業者である教員の省察・評価に加えて、学習者である知的障害者の進路学習に対する評価についても分析対象とし、考察することで、授業としての適切さを明らかにした。さらに、「進路」という名称を付して学校独自に設定した2種類の進路学習について、授業的方法に即して多面的に検討し、総合的に分析した。その結果、授業としての適切さを明らかにすると共に、自己の評価を取り入れた学習活動の構成は、自己の理解を育む進路学習として適切であることを指摘した。また、総合的な学習の時間における進路学習、及び学校独自に設定した進路学習の全てが、授業に対する、多面的な評価に基づく総合的な分析によって、改善されることを示した。

第4部では、本研究の要約を行い、第1部から第3部の各章で得られた知見を述べた。そして、

そのうえで、知的障害教育、特に知的障害特別支援学校における進路指導研究の視座について述べ、進路指導に関わる困難さについても研究対象として包摂し、より一層、進路指導研究を発展させる必要性を指摘した。

2. 審査経過

(1) 研究目的の妥当性及び研究目的と論文構成の整合性について

本研究は、知的障害教育、特に特別支援学校高等部における進路指導の実践的課題である、「連携」及び「進路学習」をテーマとしていた。研究の背景と問題の提起から研究の目的、方法への導き方、授業実践に基づいたデータの収集と分析、その考察とまとめ、いずれの段階も論理的であり、詳細で精度の高い実証的研究が行われていた。特に、これまでの進路指導研究では、検討されていなかった教員と関係者との「連携」のあり方に関する新たな観点からの分析、及び「進路学習」のあり方の検討を、目的としたことは、独創性があり、教育実践的意義が大きいと考えられた。研究としての問題の所在から導き出された研究目的の設定は妥当であり、本研究はそれらに沿った論文構成となっていた。論文目的については妥当性があり、論文目的と論文構成についても、整合性が認められた。

(2) 研究方法について

本研究においては、対象と方法についても、独創性が認められた。本研究では、「連携」をテーマとしているため、指導者である教員だけでなく、学習者である知的障害者やその保護者、関係機関の支援者などを対象とし、進路指導における教育課題についての認識を多面的に把握できる設定となっていた。方法については、教育課題に即して、聞き取り、アンケート、あるいは自己省察などの方法でデータが収集され、その後、整理、分析、考察する過程を構造化するという独創性のある手法が用いられていた。そして、それらは、事例研究、実践研究、及び調査研究、いずれについても明確に記述されていた。また、結果の処理、及び分析の手続きは詳述されており、客観的、且つ論理的であった。

(3) 学校教育学の学位論文としての独創性及び発展性について

本研究は、知的障害教育、特に知的障害特別支援学校の教育実践において、喫緊の課題である、軽度の知的障害者に対する進路指導を中心にしたものであった。就職支援に関しては、企業や就労支援機関などとの連携が重要であり、当事者である生徒や家族の認識についての検討も重要であるが、これまで研究が進んでいなかった。特に進路指導の教育課題である連携、及び進路学習について、教育課題にかかわる教員、学習者としての知的障害者やその保護者、さらには関係機関の支援者の認識を、各々把握し、整理、分析、考察する過程を構造化するという手法は、これまで用いられてこなかった。本研究によって、指導者、あるいは支援者等の、相互の価値観や認識の影響が明らかになったことは、高く評価できると判断された。

そして、その結果には、知的障害特別支援学校における教育実践を伸展させるために有益な示唆を含んでおり、実践に応用されることで、より一層の、知的障害者の自立と社会参加の実現に資することが期待できた。以上のことから、本研究は、独創性を持つと共に、今後の特別支援学校の教育実践に、広く影響を与えるものと評価した。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 大谷博俊 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。